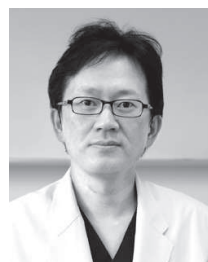


知って
おきたい

消化の病気

第5回



丹野誠志

(たんの・さとし) 1990年旭川医科大学医学部卒、94年同大医学部大学院卒。同大付属病院准教授を経て、10年イムス札幌消化器中央総合病院副院長に就任。12年より同院院長。日本内科学会指導医。日本消化器病学会指導医。日本消化器内視鏡学会指導医。

膵胆管合流異常と胆嚢がんの話

消化器の病気には、胃の病気と間違いやすいものがいくつもあります。胃の調子が悪いと思

い、胃カメラを受けたけれども異常がない、とりあえず出された胃薬を飲んでもよくならない、という話はしばしば聞かれます。おなかに症状が出る場合は、確かに胃や腸の病気が多いのは

事実です。しかし、胃と腸の検査をしたけれども原因がはつきりしない場合には、当然のことながらそれ以外の病気を疑う必要があります。その代表格が「膵臓や胆嚢」の病気です。

中でも「膵胆管合流異常」という病気があります。これは、生まれつき胆管と膵管が十二指腸の出口で一本の管になり合流する病気です。通常、胆管と膵管は別々に十二指腸の出口につながるため、胆汁と膵液が途中で混ざり合うことはありません。しかし、膵胆管合流異常があると、途中で胆汁と膵液が混ざり合い、その結果、膵液が胆管に

流れます。膵液が大量に混ざった胆汁は、胆嚢にとどまり病気を発生しやすくなります。もっとも心配な点は、胆嚢がんになりやすいことです。通常、胆嚢がんは60歳以上に多い病気です。しかし、生まれつき膵胆管合流異常があると、膵液の混ざった胆汁が胆嚢の中で濃縮され、常に胆嚢を刺激する状態になります。結果、30〜40歳代と

今月の
ピックアップ
ドクター

いう若さで胆嚢がんや胆管がんになってしまうのです。

また、女性に多いのが特徴ですが、男性も油断はできません。人間ドックで胆嚢ポリープがあるといわれた人、特に胆嚢の壁が厚いといわれた人は要注意で、精密検査を受ける必要があります。

す。症状は、みぞおちや背中中の痛みが多いことや幼少時の腹痛中には精神的なものと位置づけられたケースもあります。ただし、まったく症状のない人もいますので注意が必要です。この病気の治療は、胆嚢がんや胆管がんを確実に早期診断す

ることが難しいこともあり、がんを認めなくても予防的に手術をおこなうことを推奨します。しかし、膵胆管合流異常にも種類があり、病態はさまざまであることから、やはりこの病気に詳しい胆道の専門医の診察を受けることが必要です。